「男、突っ走る！」

第23回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（18）　中央高校3年2組生徒

濱口　寧々（18）　中央高校3年2組生徒

田崎　良樹（18）　中央高校3年2組生徒

滝　由紀恵（18）　中央高校3年2組生徒

水澤　光太（18）　中央高校3年2組生徒

宮田　春奈（18）　中央高校3年5組生徒

鬼頭　美彩（18）　中央高校3年6組生徒

五十川　孝之（18）　中央高校3年6組生徒

入沢　茜（32）　中央高校3年2組副担任

1　中央高校・全景（朝）

N「七月に入り、夏真っ盛りとなりました。一学期の期末考査も何とか終わり、検定試験勉強と生徒会役員の仕事、そして脚本家に向けての活動に力を注ぐ毎日が続いていました」

2　同・3年2組教室

雅也、良樹、光太が居残っており、それぞれ勉強をしている――雅也の机の上に『ITパスポート』と書かれた分厚い参考書が置いてある。

雅也「（シャーペンを置き）ああ、全然分かんない。もう今日、勉強するの辞めようかな」

良樹「何が？」

雅也「ITパスポートの勉強。茜先生から受けてみないかって言われて勉強してるんだけどさ、これまでの情報処理検定とは全く違い過ぎて……何なの、この膨大な情報量

……」

光太「そりゃ、ＩＴパスポートは国家資格だからな。それを高校生のうちから受けようっていうのが酷な話だよ」

雅也「参考書見てると、情報処理検定とか普段の授業で習ったことも出てくるけどさ、このマネジメント系っていうジャンルの問題なんてさ、事務とかさ、会社規模の話が出てくるから全然分からなくて」

光太「どれ？」

雅也「分かる、これ？（と参考書を見せる）」

光太「何にも分からない」

雅也「だら。もう全然分からなくて。こんなもの取得しなくても、別に脚本家にはなれるんだけどさ」

光太「そういえば、今就職組のほうはどうなの？　そろそろ求人とか学校に来てるんじゃないの？」

良樹「進路主任の先生の話だと、今年は去年よりも求人少ないんだってさ」

雅也「やっぱりどこも不景気なのかな」
良樹「さあな」
光太「うっちーもそうかもしれないけど、就職組の人でさ、もし進路決まらなかったらどうするの」
雅也「え……？」
光太「脚本書いて売り込む活動をしてるのは知ってるけどさ、それでも卒業までに決まらない可能性だって、正直あるわけだろ」
雅也「まあ……そうだね」
光太「そういう時って、どうするの？」
雅也「そりゃ、就職浪人になってでも、やるしかないよね」
光太「大学とかに行くつもりはないの？」
雅也「大学は考えてなかったなぁ。それに、今から勉強したって遅いでしょ。五組と六組なんて、一年生のうちから大学に入る前提で勉強してるような人たちの集まりなんだよ。そんな人たちと同じ大学を受験できるわけがないじゃん」

光太「俺は、ＡＯ入試狙ってるんだ。それなら、面接と自己ＰＲだけで、筆記試験もないからさ」

雅也「へえ、そういうやり方もあるんだ」

光太「だからさ、ちょっとうっちーに相談に乗ってもらいことがあってさ」

雅也「何？」

光太「（プリントを見せて）そのＡＯ入試の時に学校に出す自己ＰＲ文っていうのを書いてるんだけどさ、どうやって書いて良いか分からないんだよね。教えてくれない？」

雅也「水澤が入る大学でしょ。俺はゴーストライターじゃないんだからさ。俺に相談されてもねぇ」

光太「頼むよ、そんな冷たいこと言わないでさ」

雅也「しょうがないなぁ。じゃあ、まず水澤に質問だ。水澤は、どうしてその大学に入りたいって思ったの？　たくさん大学がある中で、そこを選んだ理由があるでしょ」

光太「うん、ある」
雅也「じゃあ、まずそれをどっかにメモして」
光太「分かった（とノートに書き始める）」
雅也「じゃあ、次の質問ね。その大学に入って、水澤自身が頑張りたいってことを、いくつかあげてごらん」
光太「何個ぐらいが良い？」
雅也「最低五つだな。そこから膨らませれそうなものを三つに絞れば良いから、まずは箇条書きで良いから書いてごらん」
光太「おお」
　その様子を見ている良樹。
雅也「書いた？」
光太「書いた」
雅也「じゃあ次は、その大学を卒業した後、自分がどういう人間になりたいか、あるいはどういう仕事に就きたいかを書いてごらん」
光太「難しいな」
雅也「自分の進路でしょ。無理に文章にしな

くて良いから、単語でも良い、まずは何か使えるキーワードを出してごらん」
光太「分かった、やってみる」
雅也「それができたら、また教えて」
と、参考書を開いて、中を読み始める。
良樹「木内、やっぱりお前は、ゴーストライター向いてるよ」
雅也「何急に？」
良樹「水澤以外にも、こうやって自己ＰＲに悩んでる人、結構いるんじゃないかな。木内がそうやって質問形式で聞いていけば、すらすら書ける人いるんじゃないかな」
雅也「みんなね、最初から文章にしようって思うから詰まるの。まずは、どんな内容を書くかっていう材料を集めないと。材料もないのにカレー作れって言われたって無理でしょ。それと一緒」
良樹「なるほどね」
雅也「良樹は、普段からラノベとか小説とか読んでるから、ある程度の文章は書けるん

じゃないの？」
良樹「どうかな。でも小説と自己ＰＲ文は違うからね」
光太「うっちー」
雅也「どうした？」
光太「メモしてたら、頭の中で文章浮かんできた」
雅也「じゃあ、それを書くんだ」
光太「オッケー」
雅也、微笑んでその様子を見ている――と、由紀恵と寧々が入ってくる。
寧々「あれ、まだ残ってたの」
雅也「部活終わったの？」
寧々「うん」
由紀恵「私も」
寧々「明日の時間割、確認しに来たの」
雅也「メールくれれば、送るのに」
由紀恵「松井じゃあるまいし」
雅也「言うね」
由紀恵「あいつ、いつもメールしてくるんで

しょ」

雅也「そうなの。毎日『明日の時間割教えて』ってメールくるの。だからね、もう松井からのメールが来る前に、先にメールだけ打っといて保存しとくんだわ。それで向こうからメールが来たら、そのメールをすぐに送ると」

寧々「めっちゃ計画的じゃん」

雅也「だって、松井のメールに気づくのが遅くなることだってあるでしょ。だから、先に用意しとくんだよ」

由紀恵「何もそこまですることないのに」

雅也「アテにされてるうちが花だよ。頼られなくなったら終わりだわ」

寧々「確かに、このクラスはママで成り立ってるようなもんだしね」

雅也「そんなことないよ」

寧々「だって、特に英語のノートなんてさ、いつもママのをみんな映してるじゃん」

雅也「それは一年生の時からの恒例行事みた

いなものでしょ」
寧々「だからふと思うんだって。ママがいなくなったら、みんなどうするんだろうって」
雅也「確かに、ノート借りようと思ったその日に、俺が体調不良で学校を休む可能性だってあるもんね」
寧々「頼りすぎるのも良くないじゃないかなって、最近になって思うの。それに卒業したら、そうやって身近に助けてくれる人もいなくなるわけだし」
雅也「卒業まであと八ヶ月……でも正確に言うと、八ヶ月もないのか」
寧々「一学期も、再来週には終わっちゃうし、何で三年生になるとこんなに学校生活が早く終わっちゃうって感じるんだろ」
由紀恵「それは私も思う。特にイベントとかさ、そういうのがあったわけでもないのに、気が付いたらもう期末テストも終わって、夏休みも間近になってるもんね」
雅也「特に俺たちのクラスは、検定勉強に追

われて、検定本番まで残り何日みたいな感覚もあるからじゃないかな」

由紀恵「木内なんて、原稿の締め切りとか、そうやって追われるものがあると早く感じるでしょ」

雅也「めちゃめちゃ早く感じるよ。あと何枚書いたら終わるって気持ちで原稿書いてたら、もう一週間とか二週間経ってたりすることなんて普通にあるもん」

光太「よし、書けた！」

雅也「（驚いて）びっくりした、そんなでかい声出さなくても良いでしょうが」

光太「ごめんごめん、つい力入っちゃって。（とプリントを雅也に渡して）先生、お願いします！」

雅也「誰が先生だよ」

と、苦笑しながらも光太のプリントを読み始める。

3　学校付近の道

雅也が自転車を引いており、由紀恵が歩いている。

由紀恵「最近になって、毎日の学校生活をちゃんと楽しんでいかなきゃなかってすごく思うの」

雅也「確かにね。今日だって、ああやってクラスに残ってみんなと何かをするっていうのが、別に大したことしてるわけじゃないんだけど、楽しく感じるんだよね」

由紀恵「特に寧々と水澤は、好きな人同士だから楽しいだろうね」

雅也「好きな人がすぐ側にいるのに、クラスの男子たちの手前、仲良く一緒にいられないのは、何だか可哀想な気もするけど」

由紀恵「そういえば、それで思い出したけどさ、今噂流れてるよ」

雅也「何の？」

由紀恵「木内が付き合ってるっていう」

雅也「誰と？」

由紀恵「寧々と」

雅也「は？　俺が濱口と？」
由紀恵「うん」
雅也「何で？　だって、濱口と水澤は現在進行形で付き合ってるでしょ」
由紀恵「それは私だって分かってるよ。けどクラスの男子たちが、そうやって噂してるから」
雅也「ちょっと男子〜。何でそう思うかね」
由紀恵「ほら、寧々と水澤、クラスでは話さないようにしてるでしょ。けど、木内は元々寧々とはよく話すじゃん。だからそれを見て、寧々は水澤と別れて今は木内と付き合ってる、って思ってるらしい」
雅也「単純すぎるだろ。そんなことで噂流れたら、男子と女子が仲良く喋ってたら、それだけで付き合ってるって噂が流れることじゃん」
由紀恵「しょうがないよ、うちのクラスの男子は単細胞の集まりなんだから」
雅也「その発言は炎上するから、絶対教室で

は言うなよ」

由紀恵「分かってる。でも本当にそれぐらい、ちょっと話しただけで付き合ってるって勘違いされるぐらいなんだから、気を付けなよ」

雅也「そう言われても、だからって濱口と喋るなってわけにもいかないでしょ。結局何だかんだ話すこともあるしさ。それに他のクラスの仲の良い女子とだって喋ってるんだよ。その理屈で言えば、一体俺は何人の女と付き合ってるんだっていう話になっちゃうじゃん」

由紀恵「だから単細胞なの。本当に変な噂にだけは気を付けなよ」

雅也「気を付けなよって言われてもなぁ」

険しい顔の雅也。

4

中央高校・中庭（数日後）

ごみ袋を持った春奈、美彩、孝之がゴミ拾いをしている。

N「思いがけない噂に驚いたものの、僕の中ではそんな噂など気にせず、学校生活を楽しもうと思っていました。噂を気にして、普段の友達と話すことができない状況が嫌だったからです。でもそんなくだらない噂によって、僕はしばらく虫の居所が悪い日が続いていました」

5　学校周辺の道

雅也、光太、寧々、由紀恵がゴミ拾いをしている――と、近くの民家からドーベルマンの鳴き声が聞こえてくる。

寧々「来るぞ……」

雅也「え？」

と、その民家のベランダから女性の怒鳴り声が聞こえてくる。

女性の声「中央高校の生徒さんは、ロクな人がいないのかしら。いつもいつも騒々しくて、こっちは迷惑してるんですけど」

光太「またあのババアが何か怒鳴ってるよ」

由紀恵「犬が吠えると、飼い主が怒鳴るって
いう合図みたいなものだもんね」
雅也「ああ、何か話には聞いてたけど、ここ
の家の人なんだ」
と、またドーベルマンの鳴き声と、女
性の怒鳴り声が聞こえる。
女性の声「どうしていつも私の邪魔ばっかり
するのかしら。うるさいんだけど」
と、寧々が不機嫌な顔になると、民家
に向かって、
寧々「私たちが何かしましたか。ちょっと黙
っててくれませんか」
光太、慌てて寧々を引っ張ると、
光太「おい、落ち着けって。何言っても無駄
だぞ」
寧々「けど、こっちだって言うだけ言われて、
黙ってられないでしょ」
光太「ああいうのは、何もしないのが一番な
んだよ」
と、雅也がゴミ拾い用のトングをその

場に投げつけると、
雅也「（民家に向かって）うるせえ、クソババア。文句あるなら直接面出せや、ゴラァ」
呆然と雅也を見ている光太、寧々、由紀恵。
女性の声「文句なんてありませんよ。私はただ邪魔だって本当の事を言ってるだけなんですから」
雅也「（怒鳴って）こっちは学校の授業終わりに、生徒会活動の一環でゴミ拾いやってるんだ。学校の周りを綺麗にする活動して何が悪いってんだよ。そこまで文句言うんだったら、この辺のゴミ拾い、全部テメエがやれば良いじゃねえか。文句言う暇があって口動かす元気があるんだったら、お前も掃除しやがれってんだ馬鹿野郎ッ」
女性の声「私はそんなことする暇なんてないんですの」
雅也「へえ、文句垂れ流す暇はあるって言うのに、ごみ拾いをする時間はないって言う

のかよ。一体あんた、普段どんな生活してるんだ」

と、光太と寧々、慌てて雅也を羽交い絞めにすると、歩き出す。

寧々「ママ、今日は戻ろう」

光太「これ以上はダメだ。うっちー帰るよ」

と、連行していく――由紀恵、雅也が投げたトングを拾うと、後ろをついていく。

雅也「離せ、この野郎ッ」

6

中央高校・中庭

雅也たちが戻っている――意気消沈している雅也の周りを囲んでいる光太、寧々、由紀恵。

光太「どうしちゃったんだよ、うっちーらしくもない」

寧々「そうよ、あんなに切れたママ初めて見たわ」

由紀恵「木内もやっぱり人間なんだね、あん

なに怒るなんて」

と、孝之、美彩、春奈がごみ袋を持って戻ってくる。

春奈「あれ、パンテーンどうしたの？」

寧々「ドーベルマンのおばさんに、喧嘩売ったの」

春奈「え？」

雅也「売ってない。俺は、あの喧嘩を買っただけ」

美彩「何があったの？」

寧々「ゴミ拾いしてる時に、あのおばさんが文句言ってきたから、売り言葉に買い言葉で、ママがブチ切れちゃって、お互いに言いたい放題」

孝之「へえ、木内君でもそんなことがあるんですね」

春奈「感心してる場合じゃないでしょ」

雅也「はあ、何か疲れたわ……」

寧々「そりゃ、あれだけ怒鳴れば無駄なエネルギー使うわ」

美彩「どんな状態だったの？」
由紀恵「トングをその場に投げつけて、『うるせえクソババア』って言ってた」
春奈「ロ、悪ッ……」
雅也「しょうがねえだろ、本当にムカつくババアだったんだから」
と、入沢が通りかかると、
入沢「あれ、木内君どうしたの？」
寧々「ドーベルマンのおばさんと、喧嘩したんです」
入沢「あら……木内君もとうとう遭遇しちゃったんだ」
雅也「（不機嫌そうに）はい……」
入沢「ああいうのはね、無視するのが一番。変にかかわると、面倒なことになるわよ」
雅也「別に良いですよ。面倒になったら、こっちがまた力づくで押さえつければ良いだけの話ですから」
入沢「（一同に）今日どうしちゃったの木内君。いつものキャラじゃないよ」

雅也「すいません……」

と、春奈が自販機でお茶を買うと、雅也に渡して、

春奈「ほら、お茶でも飲んで」

雅也「ありがとう。みんな、ご迷惑おかけしました」

小さくなっている雅也――苦笑しながらも笑い合っている一同。

N「時間が経つと、あんなことで怒鳴る自分がバカバカしく思えました。それでもこうして、みんなが一緒にいてくれたことに、僕はふと小さな幸せを感じてもいたのでした」

つづく